

追憶・追認・追想のあの頃

亀高 京子



ものごころついてから小学校にあがるまでの私は、外遊びを思いっきり楽しんでいた。当時は、博多の郊外にある父の勤める会社の社宅に住んでいた。

おままごとやお人形ごっこ仲間に入ったこともあるが、かくれんぼや鬼ごっこ、縄跳びの方が好きだった。それよりも、男の子達と原っぱや丘を駆け廻る、陣取りが最も魅力的だった。五、六歳から小学四年生

位まで十二、三人はいたと思う。年長者がリーダー格で、小さい子にはオマケと言って、それなりのハンディをつけていたし、喧嘩の仲裁役もしていたように、適度のまとまりを持っていた。

この頃の大事件は、戦争ごっこの最中に、鉄条網で右手首の下を六センチほど切ったことである。七十年経った今も、うっすらと傷跡が残っている。網の破れ

から潜って登る最後尾にいた私は、滑り落ちてきた二人とともに転がり落ちて網にひっかけたらしい。

リーダーが血の噴き出る私の右手を高く持ち上げて、皆で我が家までついて来たことと、母の驚いた顔までは覚えていたが、その後の記憶は無い。大泣きしたのか？ 叱られたのか？ などとも思い出せない。

びっくりしたのと、痛さを我慢するのに精一杯だったのだろう。ただ、鉄条網の中に入ることは禁止されていたこと、一歳半年長の兄は初めから此の仲間には入っていないし、女の子は私とあと一人だけだった。私は好奇心旺盛で、お転婆だったことは確かだ。

家では、キンダーブック、こどものくに、こどものともをはじめ童話の本や外国の絵本に親しんだ。お気に入りの本を母にねだって繰返し読んでもらい、覚えているところを一緒に声を出す喜びを味わった。そして、妹に絵を指さし、母の真似をして語り聴かせた。

あれは夏祭りの夜だったのだろうか。家族で浴衣を

着て歩いていたら、お月さまが私について来るのだ。立止まっても横へ歩いて後戻りしてもついてくる。

常々「誰も見ていないところでも、神様はちゃんと見ていて下さるのよ」との母の言葉が頭をよぎった。その日、私はオズルの嘘をついていた。お八つに外から帰った時、石鹸で手を洗うきまりだったのに、そんなに汚れていないからと、さっと水だけで洗い、「石鹸できれいに洗った」と言ったのだ。ああ、神様はお月様の中から見ていらしたんだとドキドキした。家に入って窓をあけると、月は私の真正面に動かさずにいる。声に出さずにゴメンナサイと謝った。大抵のことは「どうして?」「何故?」と、質問する私だったが、このことだけは秘密にしておいた。

昭和七年、小学校入学は母の希望で市内の有名小学校に汽車通学することになった。とは言っても博多駅までのたった一駅である。登校は女学校に通う近所のお姉様方と一緒に、下校は母か、ねえやのお迎えだっ

たが、五月になると私は独りで大丈夫だからと言いつ張って、左手首に発車時刻の時計の絵を書いてもらい帰宅した。私にとつては大冒険の気分だった。

昼時の博多駅では駅弁売りの声が賑やかで、乗客から「お嬢ちゃん、独りで通つてるの？ えらいわね」と賞められたり、アイスクリームを勧められたが、よその人から食べ物をもらうことは厳禁されていたので、「有難うございます。でも次の駅で降りますから」と教えられた通りに従った。そして、今に大きくなつたら、あの一番おいしそうな駅弁とアイスクリームを買おうと決めていた。

東京時代

夏休みになつて、父の転勤で東京に引越した。今度は学校まで五分の近さだった。授業は全部楽しく、唱歌と体操が得意だった。

学芸会に千里君と千鶴子ちゃんと三人で「ひばり」

を歌った。千里君が「東北の田舎ではね、イトエを反対に言うんだよ。だからピーイーピーイーじゃなくて、ピーエピーエピーエとさいずるひばり——」と終わりでまで歌ってみせた。皆が面白がつて真似をしたため、元に戻らなくなつて先生をあわてさせた。後年テレビでクレージーキャッツのメンバーに桜井センリ君を見つけて驚くとともに懐かしかった。リレーの選手で活躍し、肋木登りやドッジボールに熱中した。

ドッジボールの場所とりに朝早く出かけた時、学校の前の文房具屋の老夫婦（今の私よりもはるかに若いはず）が、お日様を拍手して拝んでいる姿が印象に残っている。

父は大正デモクラシー期に学生生活を過した進歩的な人物であった。旧制高校時代の級友の妹だった母を見染めてプロポーズしたとのことで（伯母の話）、亭主関白の面もあったが、中々の愛妻家であった。母に習い事を続けさせたり、料理や編物の本を翻訳してあ

げていた。兄妹三人には希望を聞きながら本を選んでくれた。何故? と思うことは先ず自分で考えてみる、次に事典(小学生用)で調べることが教わった。辞書や事典、図鑑をひもとく楽しさは今日まで継続している。

母はハイカラな面と士族の娘として嫉られた古風な面とを備えていた。シフォンケイキやシュークリームのお手製のお八つ、私と妹の服をデザインして誂えたり、三人のセーターを様々に工夫して編んでくれた。

日曜日の晴れた日には、ピクニックや遊園地、博物館、展覧会などに家族中で出かけ、雨の日にはミツキーマウスの映画や家でゲームに興じた。春休みには高原への一泊旅行、夏休みは約一ヶ月を神戸の垂水にある伯母の別荘で、いとこ達と海に遊んだ。この時、東京の父に、せっせとお手紙を書いた。

両親ともに教育熱心だったが、主として父からは知育を、母には情操・徳育を受けたと感じている。

当時のインテリ中流階級の典型だったと思うが、今、ふり返ると、両親の愛情に包まれた心豊かな楽しい情景が次々に展開する。

遠出しな日曜日には教会の日曜学校に通った。青学院のお兄さん先生に英語の歌を習ったり、椅子とゲームなどで楽しかったが、先生のお話によく質問する子だった。

歳末の渋谷駅で、美しい讚美歌の声に心うばわれた。紺の制服と社会鍋、救世軍のことをきいて、将来は是非とも入りたいと憧れた。

私の小学校入学直前から既に満州事変が始まっていたが、周囲は平和で社会道徳もしっかりしていた良き時代だったとの感が強い。

青島時代

三年生の秋に父がチンタオ(青島、中国山東省の港湾都市)に転勤になった。兄が地球儀で場所を教えて

くれた。チンタオは一八九八年にドイツの租借地となつて要塞を構築、第一次大戦初期に日本が占領したところで、建物や街並はドイツ時代そのままを留めていた。ビール会社勤務の父が、ドイツ人の創設したビール工場への転勤を希望したらしい。

四日間の船旅で港に近づいた時、カソリック教会の塔が青空に映え、緑の樹々の中の赤レンガの住宅など、美観に胸をときめかせた。

青島第一小学校の校長先生は中村八大さんのお父様だった。鉄筋校舎に広いグラウンド、おらかな雰囲気、担任の先生を中心に元気で仲の良いクラスで楽しい毎日だった。ある日、少し知恵おくれの女の子をかからう二人組の男子をこらしめようと、仲良しお転婆グループで作戦を練って決行し、遂に謝らせた。先生に「義を見てせざるは勇無きなり」と賞められて私達は気炎をあげた。真面目な兄と違い、私は放課後もドッジボールや友だちとのお喋りが楽しくて、人力車

のお迎えを随分待たせたものだ。

アカシアの花の甘い香りがただよう春、忠の海や湛山で過ごす夏、運動会に張りきる秋、冬は零下七度位の寒さだったがスケートを楽しんだ。また、チームの温かい室内でレコード鑑賞や読書に

ふけた。少年少女向きに文学全集などは三分の一で読んだら、続きを自分で創作する習性があった。いくつかは本の過程、結末と合致したが、作者の文章に感心の溜息をついたものだ。キュリー夫人伝や科学関係の本で、「研究」の大切さを知ったが、どんなに科学が進歩しても、潮の干満を変えることは出来ないのではないかと考えたりした。私をとりこにしたのは、山本有三著『心に太陽を、唇に歌を持って』で、全頁を暗誦した。

青島には中国人はもとより、ヨーロッパ諸国、白系



ロシアなど多くの民族が住んでいた。中国女性の“てん足”や“泣き女の葬列”をはじめ諸民族の生活様式、生活文化の多様さに興味を覚えた。素朴な疑問は、同じ土地で生活しているのに此の相違は何に起因しているのだろうか？であった。この強烈な異文化接触が後年の生活文化史研究へのきっかけとなった。

十二年の七月七日、盧溝橋で日支事変が勃発した。

「女と子どもは内地か満州に避難せよ」の命令で、母と妹との三人は大連経由で東京へと向かった。しかし、妹が船中で体調をくずしたため門司で下船し、私は知人の家から箱崎小学校に通うことになった。小学校卒業までの短期間であったが、この時の担任の曾木先生は、私の最も尊敬し思慕する先生である。眉目秀麗、凛々しく、生徒を公平に愛する先生。何よりも生徒が自発的に考え学びたくなるような学習指導法は抜群であった。

クラス全員のあこがれであったが、私にとって先生

は完全に“初恋の人”であった。妹の病気はすぐに回復したが、私は断固として東京行きを拒否した。

女学校入試もあるため、私の希望はかなえられて、最初の社宅に移り住むことになった。

ここで六年ぶりにケガをした鉄条網に再会した。当時から住んでいた小母さんに“お医者さんで六針も縫ったこと、母がどんなに心配したか、男の子をつれて両親が謝りに来たことなど”を昨日のこのように聞かされた。また、「この木に登ってご機嫌だったわね」と言われて思い出した。私の記憶は、この時に反芻されて確かなものとなった。

翌年、日本の軍隊によって治安も復活したので、青島に戻るようになった。

出発する朝、もう簡単には登れないほど伸びた木を見上げながら、「また会いましょうね」と別れを告げた。

(元東京家政学院大学)